Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

小学校体育に関する大学生の授業力量

江藤，真生子

(Degree)
博士（教育学）
(Date of Degree)
2020-09-25
(Date of Publication)
2022-09-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7833号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007833

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式４）

論 文 内 容 の 要 旨

氏　　名　江藤　真生子
専　　攻　人間発達専攻
指導教員氏名　山口 悦司

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

小学校体育に関する大学生の授業力量

論文要旨

本研究の目的は，小学校体育に関する大学生の授業力量を解明することである。この目的を達成するために熟練教師の授業力量の調査を実施し，大学生の調査結果と熟練教師の調査結果を比較し，大学生の授業力量と熟練教師の授業力量の共通点と相違点を明らかにする。また，熟練教師の調査結果と比較して特徴づけた大学生の授業力量と，小学校教師や中学校および高等学校教師（以下，中・高教師とする）ならびに中・高教師志望の大学生を対象とした先行研究で解明された授業力量と比較し，大学生の授業力量の特徴について議論を行う。本研究の成果は，これまで明らかにされていなかった小学校体育に関する大学生の授業力量の特徴を解明できたことであり，体育科教育学における教師教育研究への貢献を期待できるであろう。

本論文は，6つの章から構成される。各章の概要は以下の通りである。第１章では，小学校体育の大学生の授業力量に関する問題の所在と目的を導出し，目的を達成するための研究方法について述べた。まず，授業力量は信念，知識，教授技術の要素で構成され，各要素間には関連性があることを定義した。次に，授業力量がどのように解明されてきたのかについて，国内外の体育科教育学における教師教育研究の授業力量に関する先行研究をレビューした。レビューの対象は，国内外の代表的な体育科教育学に関する学術誌に掲載された教師教育研究の授業力量に関する文献とした。海外文献に関しては，体育・スポーツ学分野のデータベースであるSPORTDiscus™ with Full Textを用いて文献を検索した。レビュー文献や研修やプログラムの評価に関する文献を除いた55編を選定した。国内文献については，国内の代表的な体育科教育学関連学術誌から28編を選定した。これらを合わせた計83編をレビューの対象とした。レビューの結果，小学校体育に関する大学生の授業力量の実態が把握されていないことが問題であり，その実態の解明が喫緊の課題であることを明らかとした。この課題を解決するために，大学生の授業力量を解明することが目的となることを導出した。続いて，授業力量を解明するための研究方法の概要を説明した。本研究の研究方法は，事例研究ならびに大学生の授業力量と熟練教師の授業力量の比較であった。

第2章と第3章では，小学校体育に関する熟練教師の信念，知識，教授技術を実証的に明らかにした。第2章は，熟練教師の信念と知識に関する調査の結果である。信念については，対象は，体育専科教師1名（教職歴19年）とその同僚教師18名（教職歴6年以上5名，11年以上9名，21年以上4名）であった。データ収集の方法は，信念に関する質問紙調査法および半構造化面接調査法であった。収集したデータをKJ法により分析した結果，熟練教師は，児童の実態把握や環境整備，技能向上を目指した指導，児童に身につけさせたい内容などを重要であると考えていることを明らかにした。

また，熟練教師の知識について，対象は体育専科教員1名であった。データ収集の方法は，知識に関する半構造化面接調査法であった。分析に際しては，教材内容に関する回答を教材内容に関する知識領域（吉崎，1997）に分類した。その結果，熟練教師の教材内容についての知識は，運動の行い方に関する知識や運動を分解した要素に関する知識，その要素の再構成に関する知識であった。また，熟練教師の教材内容と児童についての知識は，児童の発達段階に対応した系統性に関する知識と技能習得のための運動のコツに関する知識であった。さらに，熟練教師の教材内容と教授方法についての知識は，児童の発達段階に応じた指導に関する知識とポイントを押さえた簡易化した教授方法に関する知識であった。

第3章は，小学校体育に関する熟練教師の教授技術の調査の結果である。対象は，2名の熟練教師（ともに教職歴10年以上）であった。データ収集と分析の方法は，以下の通りであった。まず，2名の熟練教師が行った各1単位時間の体育授業のビデオデータから逐語記録を作成した。次に，イベント記録法（シーデントップ，1988）を応用して，各教授技術の頻度を算出した。さらに，熟練教師が体育授業のヤマ場で用いた教授技術を検討した。教授技術の頻度を算出した結果，熟練教師が指示やフィードバック，補助的相互作用を多用したことを明らかとした。また，熟練教師は，ヤマ場において分析的発問を行い，児童とのやりとりにより動き方を引き出し，課題を焦点化する教授技術を用いたことを明らかにした。

第4章と第5章では，小学校体育に関する大学生の信念，知識，教授技術を実証的に明らかにした。第4章は，大学生の信念と知識に関する調査の結果である。大学生の信念について，国立大学の教員養成学部の小学校体育の指導法を受講した3年次の大学生27名を対象とした。データ収集の方法は，信念に関する質問紙調査であった。収集したデータをKJ法により分析した結果，大学生は，児童の実態把握や安全管理，個に応じた指導，児童に身につけさせたい内容などを重要であると考えていることを明らかにした。

また，大学生の知識について，国立大学の教員養成学部の小学校体育の指導法を受講した3年次の大学生33名を対象とした。データ収集の方法は，知識に関する質問紙調査であった。得られた回答を教材内容に関する知識領域（吉崎，1997）に分類した。その結果，大学生の教材内容についての知識は，運動の行い方に関する知識と運動様式に内在する安全に関する知識であった。また，教材内容と児童についての知識は，学習指導要領の目標や特性論の視点からとらえた運動に関する知識と，運動を行う際の児童の安全に関する知識であった。さらに，教材内容と教授方法についての知識は，指導する際の安全に関する知識であった。また，3つの知識領域には，安全に関する知識の記述が示された。

第5章は，大学生の教授技術に関する調査の結果である。国立大学の教員養成学部で教育実習に参加した3年次の大学生2名を対象とした。データ収集と分析の方法は，以下の通り

であった。まず，2名の大学生が行った各1単位時間の体育授業のビデオデータから，逐語記録を作成した。次に，イベント記録法を応用して，各教授技術の頻度を算出した。また，体育授業のヤマ場の大学生の教授技術を検討した。教授技術の頻度を算出した結果，2名の大学生が，補助的相互作用や指示などを多用していたことを明らかにした。また，2名の大学生が，ヤマ場において分析的発問を用いたが，児童に熟考する間を与えなかったことを明らかにした。

最後の第6章では，前章までに明らかとなった大学生の授業力量について総合的に考察を行った。まず，大学生の授業力量の調査結果と熟練教師の授業力量の調査結果を比較し，共通点と相違点を明らかにした。次に，中・高教師ならびに中・高教師志望の大学生，小学校教師の授業力量に関する先行研究との議論を行った。これらの議論を通して，小学校体育に関する大学生の授業力量の特徴を解明した。小学校体育に関する大学生の授業力量の特徴は，以下の通りであった。まず，小学校体育に関する大学生の信念は，授業の実施段階において計画的な指導や安全管理が重要であるとした考えであった。次に，小学校体育に関する大学生の教材内容についての知識は，運動様式に内在する安全に関する知識であった。また，大学生の教材内容と児童についての知識は学習指導要領の目標や特性論の視点からとらえた運動に関する知識と，運動を行う際の児童の安全に関する知識であった。さらに，大学生の教材内容と教授方法についての知識は，指導する際の安全に関する知識であった。くわえて，大学生のすべての知識の領域には，安全に関連する内容が含まれていた。最後に，小学校体育に関する大学生の教授技術は，励ましや受理を多用していたことであった。また，ヤマ場における大学生の教授技術は，分析的発問の後，児童の回答を待つことができず，次の活動の指示と説明を行っていたことであった。

続いて，この大学生の授業力量の特徴を基に小学校体育に関する初任者研修への示唆を議論した。議論に際して，授業力量の要素間の関連性を仮説的にとらえた大学生の授業力量モデルを提案した。仮説的な授業力量モデルを初任教師の授業力量とみなし，その初任教師の授業力量と初任者研修の指導内容を比較し，初任者研修の課題を議論した。小学校体育に関する初任教師の授業力量は，信念とそれに関連する知識を保持しているものの，関連する教授技術を行うことができないといった問題を抱えているととらえられた。初任教師の授業力量が抱える問題に対して，初任教師の授業力量と初任者研修の研修内容にギャップが生じているごとが課題となった。ギャップとは，初任者研修が初任教師の授業力量の問題の解決となっていないことであった。この課題に対して，指導者に強制されるのではなく，初任教師の信念と知識を活かして初任教師が教授技術を獲得する初任者研修となることが解決につながると示唆を提案した。

（注）3,000～6,000字（1,000～2,000語）でまとめること。

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	江藤真生子		
論文題目	小学校体育に関する大学生の授業力量		
判　　定	合　格・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	准教授	山口　悦司
	副　査	教授	稲垣　成哲
	副　査	教授	吉永　潤
	副　査	教授	河辺　章子
	副　査	岐阜大学・教授	益子　典文

要　　旨

本論文は，体育科教育学の教師教育研究に位置付けられるものであり，小学校教師を志望する大学生に焦点を当て，その授業力量の解明に取り組んだ研究である．本研究の理論的な側面については，教師教育学の先行研究を参照し，授業力量を信念・知識・教授技術という3つの要素から構成されたものと定義している．方法論的な側面については，事例研究および熟達者一初心者比較の手法を採用している．実証的な側面については，日本の小学校の熟練教師および小学校教師を志望する大学生を対象とした調査において，面接法・質問紙調査法・観察法によって得られたデータに基づいている．

本論文は，全6章から構成されている．第1章では，序論として，授業力量の理論的枠組み，体育科教育学における教師教育研究の研究動向，体育科教育学における教師教育研究の課題についての議論が先行研究に基づいて行われている．その上で，本研究の目的と，その目的を達成するための方法が述べられている．

第2章と第3章は，熟練教師を対象とした調査研究である．第2章は，熟練教師の信念と知識についての調査結果である．教職歴19年の小学校教師1名を対象とした面接調査，および18名の小学校教師に対する質問紙調査の結果，信念については，熟練教師が環境整備や専門的指導などを重視していることを明らかにしている．また，知識については，熟練教師が運動を分解した要素に関する知識，その要素の再構成に関する知識等を獲得していることを見出している．

第3章は，熟練教師の教授技術に関する調査結果が述べられている．教職歴10年以上の小学校教師2名が行う体育授業のビデオデータの逐語記録について，イベント記録法を応用した分析を行っている．その結果，熟練教師の教授技術の特徴として，フィードバック，補助的相互作用，課題を焦点化する教授技術などを用いることなどを明らかにしている．

第4章と第5章では，本研究の核心部分である大学生を対象とした調査研究が詳述されている．第4章は，国立大学の教員養成学部3年次の大学生を対象とした信念と知識についての調査結果である．信念については，大学生27名を対象とした質問紙調査により，大学生が安全管理や個に応じた指導などを重視していることを明らかにしている．知識については，大学生33名を対象とした質問紙調査を通して，大学生が運動を行う際の児童の安全に関する知識，指導する際の安全に関する知識を獲得していることを見出している．

第5章は，大学生の教授技術に関する調査結果である．2名の大学生が行う体育授業のビデオデータの逐語記録について，イベント記録法を応用した分析を行った結果，大学生の教授技術の特徴として，補助的相互作用を多用すること，分析的発問を用いるが児童に熟考する間を与えなかったことなどを見出している．

最後の第6章においては，小学校体育に関する大学生の授業力量に関する総合的な考察がなされている．大学生と熟練教師の調査結果の比較に基づく議論および小学校や中学校・高等学校の現職教師を対象とした先行研究との比較に基づく議論を通して，小学校体育および大学生に固有な授業力量の特徴を結論付けている．併せて，初任者の授業力量と初任者研修の実態とのギャップの可能性を指摘するとともに，体育科教育学における初任者研修の改善に向けた示唆を論じている．

本論文は，小学校教師を志望する大学生の授業力量の解明に本格的に取り組んだ体育科教育学の研究として評価できるものである．第1章において，体育科教育学の教師教育研究として授業力量の解明に取り組んでいる国内外の文献を丁寧にレビューした上で，小学校体育に関する大学生の授業力量の解明が体育科教育学の教師教育研究の空白領域であるという研究課題を見出し，その研究課題に取り組んでいる．このことから，本論文の独創性，学術性，先行研究の検証の十分性を認めることができる．実証性については，第2章から第5章にかけての熟練教師および大学生を対象とした調査を通して，面接法・質問紙調査法・観察法によって得られたデータの統計的検討に基づいた議論を展開している点を評価することができる．明晰性についても，第6章において，第2章から第5章までの調査結果を整理した上で，関連研究との議論を丁寧に行い，結論を導き出すことができている．最後に，本研究は，小学校教師を志望する大学生の授業力量を解明するという立場から，教科教育学や教師教育学等との学際的領域で取り組まれたものであり，人間発達環境学にふさわしいものと判断できる．

以上より，本研究は，体育科教育学における教師の授業力量について，小学校教師を志望する大学生に固有な授業力量を解明したものであり，その信念・知識・教授技術について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める．

なお，学位申請者の江藤真生子氏には，本課程博士学位請求論文に直接関係する5編の審査付き学術論文がある（いずれも単著またはファーストオーサー）．これらは本論文の内容が学術研究としての一定の新規性と独創性を有していることの証左である．

江藤真生子（2015）「小学校体育授業における教師の「言葉かけ」の検討：表現運動とゲームの授業を事例として」『（公社）日本女子体育連盟学術研究』第31巻，47-57.

江藤真生子（2019）「小学校体育授業の指導観の変容に関する事例研究：養成段階の学生を対象とした教科の指導法に関する講義に着目して」『日本教科教育学会誌』第42巻，第3号，83-94.

江藤真生子（2020）「小学校教師志望学生の体育授業の言葉かけに関する事例研究：教育実習における体育授業を対象として」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第13巻，第2号，39-48.

江藤真生子・本田崇将（2017）「小学校体育専科教員の資質能力に関する一考察：専科教員と同僚教師を対象とした質的方法による事例的検討」『臨床教科教育学会誌』第17巻，第1号，17-28.

江藤真生子・嘉数健悟（2019）「体育科教師教育研究の動向と課題について：Tinningの理論的方向性による研究の分類から」『体育科教育学研究』第35巻，第2号，1-16.

よって，本審査委員会は，学位申請者の江藤真生子氏が博士（教育学）の学位を得る資格があると認める．